

山形・平形遺跡

- 1 所在地 山形県東田川郡藤島町平形
- 2 調査期間 一九七七年(昭52)四月～一〇月：第六次調査
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 佐藤庄一
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代後半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
平形遺跡は、出羽国当初の国府所在地と考えられていたところである。この地域内で、計七次にわたる発掘調査が実施されてきたが、奈良時代にまで遡る遺物は未だ発見されておらず、むしろ平安時代以降の遺物が数多く見られるようである。

木簡は第六次調査で、調査区の南端、SE2井戸跡から一点出土している。SE2は直径約一・六m、深さ約二mの掘方の中に七段の蒸籠組みの井戸枠を拵えたもので、ここからは土器が主に出土しており、なかには「阿」と墨書された赤色土器もあった。調査段階では、当該地区は平安時代後半の集落跡と考えられている。

8 木簡の内容

SE2から出土した一点の木簡は現存長一〇・二cm、幅〇・五cmを測るが、細く割られたうえ、角を削られており、判読は不可能である。

ある。

9 関係文献

山形県教育委員会 「平形遺跡第六次発掘調査・現地説明会資料」 一九七七年

(尾形與典)



韓国慶州市にある、新羅時代の宮城の苑池「雁鴨池」発掘の調査が、一九七五年から二年余にわたって行われていたが、その発掘報告書が、早くも昨年末に同国文化財管理局から刊行された。図版篇ともに二冊からなる大冊であるが、なかに八世紀代の木簡が四十七点含まれているのは注目される。「天寶十載」「宝応四年」等中国紀年をもつもののほか千支年ものがあり、また付札の切り込み状のつくり方が、居延漢簡の付札に似ているのは興味深い。

(編集子)